

## Atelier KISHISHITA (岸下 真理・岸下 和代)



Atelier KISHISHITAにて

## 経歴

## 岸下真理

1969年 生まれ 兵庫県出身  
 1993年 金沢工業大学工学部建築学科卒業  
 1995年 金沢工業大学大学院工学研究科修士課程修了  
 1995年～  
 2000年 無有建築工房  
 2001年～ Atelier KISHISHITA 共同設立

## 岸下和代

1970年 生まれ 富山県出身  
 1993年 金沢工業大学工学部建築学科卒業  
 1993年～  
 1996年 金沢計画研究所  
 2001年～ Atelier KISHISHITA 共同設立

## 受賞歴

2002年 住まいのリフォームコンクール 国土交通大臣賞  
 2007年 大阪建築コンクール 渡辺節賞  
 2008年 日本建築士会連合会賞 優秀賞  
 2010年 JIA関西建築家新人賞  
 2011年 大阪建築コンクール 大阪府知事賞  
 2013年 日本建築美術工芸協会 荻原義信賞  
 2014年 木材活用コンクール 林野庁長官賞  
 2014年 大阪建築コンクール 大阪府知事賞  
 2014年 日本建築士会連合会賞 奨励賞  
 2014年 グッドデザイン賞

聞き手 清原健史 (安井建築設計事務所)  
 写真撮影 河合止揚

## 「繋ぐということ」

岸下真理、岸下和代のアトリエは大阪市内の下町、築50年の雑居ビル1階にアトリエ兼住宅としてある。

印刷業の町工場兼倉庫として使用されていた約22坪の空間を改修し、家具や杉板のパーティションを介してアトリエ部分と住宅部分がゆるやかに繋がるワンルームとなっている。

職場と住居が同じ場所という一昔前までは当たり前であった職住一体の空間で、家族3人のつながりが自然と堆積していく生活がそこにはある。

22坪のワンルーム空間は決して空調完備ではないが、「暑い寒い1年で慣れる、それよりも人間力をあげることが重要ではないか」との想いを根底に生活をされている。確かに空調完備の空間で育つことが人間としてあるべき姿なのかを改めて考えさせられる。

アトリエ兼住宅はそこを訪れるクライアントにとって住み方のショールームともなっているが、設計者のつくる空間や住み方を肌で感じることで職住一体のアトリエは、住宅を手掛ける建築家にとって1つの理想のスタイルに思われた。

また、自らの住み心地を体験し、クライアントに善し悪しを説明できる空間が岸下真理、岸下和代の設計スタイルには不可欠だったのではないかと、インタビュー開始後、直ぐに感じる「実直な人柄」がそう思わせた。

岸下真理、岸下和代は両氏共、金沢工業大学で建築を学ばれた。戦争で焼け落ちなかった歴史ある金沢の町並みや師の言葉から、時間が折り重なりつくられていく「歴史的な重層性」の大切さを学んだという。

そんなAtelier KISHISHITAとMan\*go designが設計した日本圧着端子製造の本社ビルは、過去・現代・未来へと繋がる建築を模索している。

建物は「繋ぐ」をキーワードとし、各階を4つのエリアに分解し隣り合うエリアを半階毎にずらしていくことで、様々な部署の繋がりを生む提案がなされている。また、外装は内外がゆるやかに繋がる木格子をまとい、周辺環境と自然環境の中間材としてよりよいコミュニケーションをはかる空間装置となっている。この木格子は20年後には取替えられ、関連施設のベンチ等の材料として再生される計画となっている。

コンクリートの建物が数十年後にはその躯体寿命を待たずにスクラップされ、新たな建物ができあがることも決して珍しくない現在の中で、経年変化していく材料をまとい、そのまといを将来取替えることで新たな息を吹き返すこの建築は、持続可能性への1つの回答である。新たな建物が建つことを思えば十分に経済的な建築である。

日本圧着端子製造のオーナーはこの建築が国宝になることを夢めている。

国宝になる条件は「残ること」である。オーナーの想いに岸下真理、岸下和代は力強く応えている。

自分の寿命を考えると木格子の取替えに携われるのは1回位だと言う彼らに、生み出した建築には生涯つながるといふ建築人としての覚悟がそこには見える。